

高校生

との対話

人間界の騒ぎをよそに、自然界の季節はめぐり、また春が来て、進級や卒業のシーズンがやってきました。

私は三二歳で高校教員になり、七年目に指導教諭となったこともあり、担任をしたのはその間の五回だけ、学年を一巡して卒業生を送り出したのは一回だけです。このリレー連載を担当するのも気後れするような経験の浅さですが、子どもたちとの濃い日々が、私の未熟を補ってくれました。

初任校で先輩教員が、「うまくいってもいかなくても、三月で解散です。また次、頑張ろう。子どもも先生もそれでいい。

出会いと別れの春に思うこと



大阪府教育センター
附属高等学校指導教諭

池田 径

いけだ けい 春は出会いと別れの季節であり、子どもたちの心がうごめく季節です。この春もまた、そのうごめきに立ち会いながら、彼らを未来へと送り出したいと思います。

ったことも引き受けて、次に託すという姿勢の大切さを教わりました。

そうして日々子どもたちと向き合い、進級や卒業へ送り出す（ときに転学や退学を見届ける）担任の仕事は、やはり教職の醍醐味の一つだと思えます。私の担任経験は少ないですが、せつかくなので、少し異例な形でその醍醐味を味わうことになった話を書きたいと思えます。

立ち直ったクラスの最後のホームルームで

一つ目は、課題を抱えた子どももの多い二校目で受け持ったクラスの話です。

転任即一年生の担任となりましたが、初任校での成功体験もまったく通用せず（今思えば成功体験に固執する「成功トラウマ」でした）、クラスは荒れ、私もノイローゼ気味になりました。夏休み頃には退職も頭をよぎりましたが、紆余曲折を経て、彼らと文化祭の舞台で一緒に踊ることになり、それが転機になってクラスも私も立ち直っていきました。

そのプロセスから、私は教師として大

それが学校のよいところですよ」と言ってくれたことを今でも覚えています。オールドルーキーで力量もない私への励ましだったと思いますが、いわば「一期一会」の関係性の中で、目の前にいる子どもたちに、そのつどできる限りのことを精一杯にやり、うまくいったこともいかなか

切なことを学んだので、本誌でも紹介してきましたが（二〇一九年一〇月号、二〇二〇年七月号など）、今回は、「その後の話」になります。

子どもたちとの関係は劇的に改善し、迎えた最後のホームルームで私は、子どもたちへの感謝と願いを込めたメッセージを学級通信として配付しました。そして、

「このクラスで本当にいろいろなことがあったけど、今日までやりきってきたわけだから、自信を持って次に向かおう。たくさん思い出ができたけど、四月になって『前のクラスがよかった』と言わないうように。私はまったくうれしくありません。今日でこのクラスは解散です」と言いました。

子どもたちが帰った後、教室の後片付けをしていたとき、学校からの配付物がすぐに捨てられていつも満杯のゴミ箱の中に学級通信が一枚も捨てられていないことに気づき、私の思いは子どもたちに届いたと思いました。ところがです。

「前のクラスがよかった症候群」

いざ四月になってみると、クラスの中心だった（そして最もやんちゃだった）子どもたちが、廊下ですれ違うたびに「前のクラスがよかった」と言ってくるのである。

「そういうことは言わないという約束だったはず」と言ってもお構いなしです。でもそれは、年度当初によく起きる「学校アルアル」だから、そのうち収まるだろうと思っていました。しかし、丸一か月経っても、一向に収まりません。他の教員からも、「生徒たちがまだ言ってる……」とやりにくそうに言われます。

私は迷惑をかけている申し訳なさと、元担任として後始末をきちんとつけたいという思いから、その中心メンバーたちのリクエストに応じて、ゴールデンウィークに、前のクラスのメンバーでBBQをすることにしました。

周囲の教員からは、そんなことをしたらますます「前のクラスがよかった症候

群」が強まるのではないかと心配されましたが、私は賭けに出たのです。

BBQ開催！

BBQ開催が決まってから、中心メンバーたちの動きは素早く、場所の選定、機材の準備、食材の買い出し、元のクラスのメンバーへの連絡など、実にてきぱきこなしてくれたので、私は当日に身につで現地の公園に向かえばよいだけでした。

当日はスタートメンバー以外に、途中で出入りするメンバーもいて、ゆるい雰囲気の中、お昼までという予定を超えて、結局夕方まで六時間ほど続きました。

クラスが荒れていた頃、中心メンバーたちともめたことをきっかけに学校を辞めた子どもも顔を出し、私は狐につままれたような気持ちになりましたが、青空の下、芝生に寝そべって、日長一日、子どもたちと他愛のない話をして過ごしました。そして誰からともなく自然とお開きになり、公園を後にしました。

思い残しをはらす

その日以来、もう誰も「前のクラスがよかった」と言わなくなりました。私は、子どもたちの「心のお葬式」がうまくいったのだと安心しました。

クラスが立ち直ったのは年度の後半からだっただけだから、彼らに思い残しがあるのは当然で、その思い残しをはらすためにBBQに行き、彼らとことんつきあうことにしたことで、私としては、「おとむらい」がすんだように思えたのです。でも、それは同時に彼らの私に対する「おもてなし」でした。彼らの思い残しの中身は私をもてなすことであり、そのおもてなしを受けることで、私は彼らの「心のおとむらい」をしたわけです。

そこに繰り返し広げられていたのは、人と人が出会い、別れることにまつわる、心のやりとりだったのだと思います。そのやりとりを経て、ようやく彼らは「進級」し、私は担任を「卒業」していったのです（実際にそのクラスは、私が担任

をした最後のクラスになりました）。

M男が開く同窓会

もう一つは、私が唯一卒業生を送り出した初任校でのクラスの話です。

そのクラスには、人望が厚く、リーダーシップもとれるM男がいました。彼のおかげでクラスは雰囲気がよく、学校行事に全力で取り組み、成績も良好でした。卒業式の日には彼が同窓会委員を引き受けてくれ、私は将来、子どもたちの結婚式や同窓会に呼んでもらえる日を楽しみにしていました。

しかし、卒業式から半年後、元担任として初めて呼ばれたのは、M男のお葬式でした。彼は看護師を目指して専門学校で学んでいましたが、学友たちと遊んだ帰りに、同乗していた車が事故にあったのです。

私はそのときまで、担任は卒業生のお葬式にも呼ばれ得ることを想像していませんでした。お葬式がすんだ後も私は茫然としたままで、「心のお葬式」をするの

にはずいぶん時間がかかりました。そして教職とは、子どもたちの人生や命とつきあう仕事であることを思い知りました。

あれから毎年、彼の命日には同窓生たちと呼ばれて一緒に墓参りに行き、仏前で思い出話に花を咲かせています。M男は今も、私たちの思い残しをはらす「同窓会委員」であり続けてくれています。

出会いと別れの春に

春は出会いと別れの季節です。何かをやり終えることは、一つの喪失でもあります。逆に、何かをやりきれずに、思い残すこともあります。「喪失」や「思い残し」の「痛み」を鎮めるには、「悼み」の時間が必要になります。卒業式は、本来そのための時間でもあるのでしょうか。

名残を惜しむからこそ、別れゆくことができるのです。それは私たちが心を持つ命だからです。学校にいる教員も子どもたちも、心を持つ命のつながりの中にあることを、春は私にあらためて思い出させてくれるのです。